



2012年3月22日

肺がんに対する免疫細胞治療の多施設大規模解析研究結果が、 学術誌「Cancer Immunology, Immunotherapy」に掲載

瀬田クリニックグループは、非小細胞肺がんを対象に、免疫細胞治療と化学療法との併用効果に関する多施設での大規模な症例検討を実施した結果、抗がん剤単独よりも免疫細胞治療と化学療法を併用したほうが、より有意な延命効果が認められることが明らかになりましたのでお知らせします。この解析結果は、がん免疫分野の学術誌「Cancer Immunology, Immunotherapy」（電子版）に掲載されました。

今回の解析研究では、瀬田クリニックグループ 岩井和郎医師が中心となり、都内 7 箇所の中核病院の医師らとともに、予後が悪いがん腫のひとつとされている非小細胞肺がんを対象にした化学療法と免疫細胞治療の併用効果について、多数症例での解析を実施しました。

対象となった 540 名は 2001 年 11 月から 2006 年 12 月の間に、瀬田クリニックグループもしくは大学を含む中核病院にて非小細胞肺がんに対する治療を受けた症例で、免疫細胞治療の効果を生存期間から解析し、あわせて QOL（生活の質）の点からも評価しました。その結果、生存期間中央値では、化学療法単独の 15.7 ヶ月に対して、免疫細胞治療と化学療法併用では 20.8 ヶ月と約 5 カ月の延命効果が認められました。緩和ケアなどの支持療法単独 25 例と免疫細胞治療単独 31 例との比較では、支持療法単独の 5.6 ヶ月に対して、免疫細胞治療単独 12.5 ヶ月でありました。また、多変量解析の結果で、性別と組織型が免疫細胞治療の予後に関連し、特に、女性の肺腺がんでは免疫細胞治療と化学療法との併用が有効であるとわかりました。さらに、免疫細胞治療実施期間中の患者のパフォーマンスステータス（PS）を調査した結果、免疫細胞治療により良好な全身状態が維持されたことがわかりました。

レトロスペクティブな解析ではあるものの、こうした肺がんに対する免疫細胞治療の臨床効果について、第三者の統計専門家による多数例での系統的な解析の報告が行われ、また、その内容が信頼性の高い学術誌に論文掲載されたのは意義あることだと考えております。

今回の解析結果は、日本人のがんでの死亡率 1 位である肺がん全体の約 80% を占める非小細胞肺がんに対する新たな治療法の確立に向けて大きく寄与するものと考えています。瀬田クリニックグループは、がんに対する免疫細胞治療の情報発信を引き続きおこなうとともに、これからもエビデンスにもとづく免疫細胞治療の構築を目指していきたくと考えています。